優秀賞

「死」に向けて

奈良女子大学附属中等教育学校　三年　小松　佑

日常生活の中で、「死」を身近に感じる機会は殆どないと思います。むしろ疎遠に感じてどこか自分には関係のない、雲をつかむ様なはなしとして捉えている人も少なくないのかもしれません。僕自身、自分が近い未来に死ぬなんてことは想像できませんでしたし、死ぬのは何十年も先のことだと思っていました。

しかしある日、「死」を実感せざるを得ない出来事が起きました。その日はいつものように、いつもの通学路を自転車に乗って最寄りの駅まで向かっていました。そして下り坂でトラックとすれ違ったその時です。トラックの大きな存在を右に感じた次の瞬間、僕は自転車ごと右半身を下にしながら、「ふっ飛んだ」のです。大げさでも何でもなく、まさに吹き飛んでいる感覚がありました。その時僕は何が起きたのか、何故自分は浮いているのか、理解できませんでした。しかし漠然と自分がこのまま死ぬんだということが頭をよぎりました。

人は死に直面した時に、二つの思考パターンに分かれると本で読んだことがあります。死を受け入れ、許容するか、死を拒絶して生きたいと切望するかの二つです。僕はこの瞬間、死を受け入れてしまっていました。でもそれは人生の満足感や充実感からの許容ではなく、人生に対する無関心に近い諦めからの許容でした。僕自身、生きること、「生」への執着の無さと自分が死を許容しているという事実に驚き、自分に対して底知れぬ恐怖心を抱きしばらくその場を動けませんでした。吹き飛んだということも恐かった。でもそれ以上に、生きることに未練なく、あっさりと死を受け入れ、許容してしまっていた自分が「恐い」と何よりも感じました。

何か大きな目標や強い願い、大事なものを背負っていれば生きているとういうことに強い未練を持ち、死を拒絶したことでしょう。例えば、「私には幼い子どもがいる。だからまだ死ぬことはできない。」という使命感や「私は新薬を開発したい。その為にはたくさん努力をしなければいけない。だからまだ死ねない。」という強い思いなど、自分の持つ責務や目標を達成しようとするゆえの未練です。

しかし僕にはそれらの未練が一つとしてなかった。僕は何も為し遂げることなく、何の目標もなく生きていたのかと、驚愕し強い羞恥を覚えました。まだ学生だから、まだ働いていないから、そんな理由では許されない、少なくとも僕自身は許したくない、そんな感情に駆られました。

僕は今回の事故でもう一つ気付いたことがあります。それは、死の平等性です。どんなに勤勉に生き充実した人生を送る人でも、どんなに怠惰に生き軽薄な人生を送る人でも、どんな人でも、「死」は平等に突然訪れ、人は一瞬で「コロっと」死んでしまうということです。少し考えれば気付くあたりまえのことなのかもしれません。しかしふだんの生活の中ではあまり考えることのない「生きる者としてのあたりまえ」をはっきりと理解しました。

日本では仕事や人との関係や体裁を何よりも重要視する節があります。でもそれだけでは一体何のために働いているのかを見失ってしまうのではないでしょうか。忘れないでください。その労働は自分が幸せになるための、生きる上での術であり、そのために人生を捧げる必要はないということを。過労死などあってはならないということを。これは社会人の方々へだけでなく、学生の方々へも言える言葉だと思っています。自分が幸せになる為に努力し、いつ訪れるかわからない死に直面した時に、後悔することのないように生きてほしい。そう願っています。

僕は今回の事故ではっきりと死を体感し、何のために生きるのか少し分かった気がします。何のために生きるのか、それは、次に死に直面した時に、思いや使命感を持って生きてこれた、何かを成し遂げようと努力できた人生だった、と胸を張って言えるようにするためです。だからこそその為に、将来必ず訪れる「死」に向かって、幸せになるために努力し、生きて行きたい。今、心からそう思います。